巻頭言

「名村テクニカルレビュー」第２６号発刊に際して

執行役員　千代　高史

私たちを取り巻く環境は急速に変化しています。世界は3年に及ぶコロナ禍を乗り越え、経済活動は再開し、日常はコロナ禍前の状態に戻りつつあります。しかしながら、私たちは日常を取り戻した喜びに浸る間もなく多くの新たな課題に直面しています。その一つがゼロカーボンの実現です。

ここ数年の世界各地の気温上昇傾向は今年に入り拍車がかかり、過去の平均気温を 10 度前後、場所によっては最高気温を 20 度も上回るケースも頻出しています。日本でも今春以降平均気温は例年を上回り7月には各地で35度を超える猛暑日が頻発しています。また、「ゲリラ豪雨」や「線状降水帯」といった気象用語が常用化され、身近なところで頻繁に災害が発生し、大きな被害が出るようになりました。これら気候変動の主な原因として地球温暖化が挙げられ、温室効果ガスの排出量増加が大きな要因と言われています。そのため世界は脱炭素に向けた取組を加速しています。

国際海事機関（IMO）においても本年7月に開催した海洋環境保護委員会（MEPC80）の中で温室効果ガス（GHG）排出削減目標を「2050年頃までにGHG排出ゼロ」と定め、合わせて2030年までに、輸送量当たりのCO_2排出の40%削減（2008年比）の達成と、排出ゼロ達成に向けた目安として2040年までに、70～80%の削減を掲げました。

当社においても現在重油に代わる液化天然ガス、液化石油ガス、水素などを燃料とした環境負荷の低い船舶の建造が進行中であり、アンモニアやメタノールを燃料とした船舶の開発や検討も始まりましたが、世界の環境対策への加速度的な動きに対し、更にスピード感をもって対応していく必要があります。一方では、造船・舶用工業における人手不足は深刻化しており、私たちは同時にこれを補うべくDXを活用した生産性向上を推進し、事業所のスマートファクトリー化に向けた取組を進めていくことも求められます。

フランスの哲学者パスカルの有名な言葉に「人間は考える葦である」があります。これは自然の中における人間の存在としてのか弱さと、思考する存在としての偉大さを言い表した言葉とされています。私たちは確かに弱い存在かもしれませんが、思考する能力によって問題を解決し、進化していくことが出来るのは人間ならではの特権です。人間の欲望や行動が招いた自然環境破壊がもたらす脅威は、人間が知恵を結集して立ち向かっていけるものと信じています。

当社としても、人類生存のための持続可能な未来実現のために、当社がこれまで築き上げてきた技術力と豊かな人材をフル活用して、大いに貢献していくことが求められています。そこには社員一人一人の意識改革を伴う課題への取り組みが不可欠です。

最後になりますが、本誌を読まれた皆さまからの忌憚のないご意見を頂ければ幸甚です。